

# 『チーム学校及び専門職連携を推進するスクールソーシャル ワーカーの質向上を目指して』

代 表 者：川向雅弘(社会福祉学研究科長)

分 担 者：大場義貴、福田俊子、藤田美枝子(社会福祉学研究科)、  
佐々木正和(社会福祉学科)

連 携 機 関：平川悦子(浜松市教育委員会指導課スクールソーシャルワーカー・スーパー  
バイザー)、長坂聖子(浜松市教育委員会指導課スクールソーシャルワーカー)

## 【背景・目的・対象・概要】

2008年に文部科学省のスクールソーシャルワーカー(以下SSW)活用事業が開始し、本県では静岡県と政令指定都市の静岡市と浜松市にSSWが配置された。2014年の子どもの貧困対策要綱にSSWの拡充が盛り込まれ、政令市除く県内35市町全てに県教委が任用するSSWを配置することとなった。本学では2016年度から社会福祉学科にSSW教育課程を設置した。浜松市においては、SSW活用事業開始以来、市教委による積極的な活用と現任者の地道な活動により、着実にSSWの周知が図られ、SSW配置(2020年度は15名のSSWが任用)による様々な効果が生じてきている。

分担者の大場と研究協力者の平川、長坂らは、2019年度本学地域連携事業研究「静岡県内スクールソーシャルワーカーに対する専門的研修が支援活動に与える効果の検証」を行った。その結果から①研修の効果は、性別、年齢、エリア、参加回数に関係なく認められた。②資質向上のためには、児童虐待・貧困対策等の研修を充実させていくことと共に、スーパーバイズ体制の強化が求められる。またエリアの特徴を活かすことやエリア間格差を解消していくことが求められる。③困難事例への支援を複数機関で連携していくためには「現状把握」、「必要な合意形成」、「連携の仕組みづくり」、「評価・改善」、「効果検証」という、一連のPDCAサイクルに則った取り組みが必要である。④これらの取り組みを推進できるコーディネーターの養成や育成が必要であると考察し、2020年度は社会福祉学研究科にて地域連携プロジェクト(以下PJ)として、4回の研修を提供することとなった。

## 【目的と対象・実施方法・研修内容・研修内容の評価方法】

- ①目的と対象：浜松市教育委員会から任用されているSSW15名を対象に本学教員が専門的研修を行い、基盤強化を目指す。PJは2年度とする。
- ②実施方法：当PJは、リカレント教育、人材育成、大学院としての地域貢献(知名度向上)等から、社会福祉学研究科(社会福祉学原理領域)が中心になって実施する。
- ③研修内容：研修の内容は、2020年度共同研究で示された「困難事例への支援」、「連携の仕組みづくり」、「スーパーバイズ」と各教員の専門領域を勘案し決定した。  
なお、コロナ感染症予防の観点から研修はZoomで実施した。また、国内の第一人者による研修(教員もSSWと共に受講)は、新型コロナの影響で中止となった。
- ④研修内容の評価方法：当PJの目的は研究ではないため、各回や最終回に、アンケートは行わないが、参加者から研修回毎に無記名式・任意の「リアクションペーパー(感想)」を収集し、回毎のキーワードと、共通するキーワード(ソーシャルワーカーとしての基礎的な課題、SSWとしての課題)を抽出した。なお、個人を特定出来ない形に加工した。

## 【研修テーマ・概要(上段)／抽出されたキーワードと主なリアクションペーパー記述内容(下段)】

<第1回：思春期・青年期の発達障害の心理と社会的課題～二次障害への理解を深めるために～／担当：大場／参加人数 15人>

11月14日(土)2時間／研修概要：「発達障害の概念・頻度」、「子どもの発達障害と大人の発達障害の関連」、「思春期年代の発達課題と危機」、「二次障害とその影響」、「発達障害と暴力・自虐」、「虐待経験者の脳皮質容積変化」、「発達障害の人の働きづらさ」、「親自身のメンタルヘルスの危機へのプロセス」、「かかわり方のポイントとコツ(こども・親)」、「レジリエンス」、「体制整備」

### 二次障害・負の循環

発達障害の二次障害が生み出す負の循環が不適切養育へつながる高いリスクであることを、あらためて胸に刻んだ。／1歳6か月検診で約18%の子どもが発達障害の疑いがあるということを知り、医療だけでは、この先やっていけなくなる、という現実を知った。／マルチトリートメントが第4の発達障害の原因となっている可能性を知った。

### SSW、SC、発達支援、教育現場

専門職であるワーカーやSCは医療と学校をつなぐキーになると思った。／診断に関わらず、困難やつまずきを知り、本人の困り感が軽減されていく校内支援を築きたい。／幼児相談の支援体制にはまだまだ課題が多い。

### レジリエンス、受容

「レジリエンス」という言葉を初めて知った。／「SOSを出す力」を身に着けなければならぬと思った。／人間社会を正しく形成し変革する教育は、人間の多様性を受容しながら生きる意味を伝えていくことだと思う。

<第2回：ソーシャルワークにおける連携と協働の課題—コミュニティソーシャルワークの展開を通して考える—／担当：川向／参加人数 15人>

12月12日(土)2時間／研修概要：コミュニティソーシャルワーク(CSW)、わが国で多様に取り組みされているコミュニティソーシャルワーク(CSW)の共通理解(1)生活課題(特に制度の狭間にある)への個別支援と、個別課題の社会化(2)いわゆるCSW実践における共通理解のための事例 ①「ゴミ屋敷」の問題を例に ②「認知症の人と家族」が抱える問題を例に(3)CSWに期待されること —2つの事例のキーワードは「孤立」と「排除」—、CSWへの誤解と曲解 —CSWは誰が担うのか—、CSWは様々な専門職と地域住民が重なり合い、支援を補強し合う。しかし、「連携」と「協働」は容易くない —「制度の狭間」と「支援の狭間」—

### アセスメント、身近な社会資源

ソーシャルワーカー自身が利用者にとってのもっとも身近な社会資源であり、「制度」であるという意識が大切／CSWと関わる機会をもっと増やし、SSWが包括的にCSWと連携していく視点を持ちたい

### 地域、見守り、みんなで、フォーマル・インフォーマル

8050問題のような、コミュニティソーシャルワークでは対応できない問題を、地域による見守りを中心にした支援で解決していくのが理想的ではないか／フォーマル、インフォーマルの多様な関係機関に「みんなでやりましょう」といった呼びかけをしながらチームで対応することが肝心／浜松市の地域包括センターは高齢者だけでなくもっと幅広い相談機能を担うことはできないか／浜松市の外縁部や中山間地域において、市中心部と同質同様の支援をしていきたい。

<第3回:精神障がい者の地域支援/担当:佐々木/参加人数15人>

1月23日(土)2時間/研修の概要:精神障がい者のもつ精神疾患の特徴、精神保健福祉に関する医療制度、福祉制度の歴史に関して政策の変遷も交えながら説明した。後半では地域生活する精神障がい者の抱える困難や課題について様々な事例を基に報告した。また、対応が難しいとされる精神障がい者の暴力の発生機序には、本人の疾患のみならず、社会的要因、家族的要因等もあることを説明した。具体的な対応方法としてのディエスカレーションの技法についても解説した。

#### **政策、医療、歴史**

精神科医療、受け入れ施設(地域移行支援機能)、地域生活継続支援(相談支援、通所型就労支援、青年後見制度等)の連携が整っていれば多くの安定期の患者が地域生活を送ることができるのでは/改めて精神障がい者の方たちがどのような政策の中で、扱われてきたのかを学んだ/虐待者になっているケース共通の「高EE」の話が心に残った

#### **虐待、暴力、家庭の現場**

今回の研修を受けて、自分の仕事により一層やりがいを感じた/同居する家族への暴力への対応について、当事者が落ち着いているときに暴力はいけないと話し合うこと、暴力を受けたら大げさに痛みが本人が我に返るようにすること、暴力を受けていることを秘密にしないこと、警察に通報することなど様々な対応の仕方を学んだ/福祉サービスの認定調査では表れない現場の大変さを、しっかりワーカーが勘案しなければならないという話を聞き、SSWとしても事務的な質問では分かり得ない当事者の大変さを代弁することを忘れずにいようと思った/精神疾患のある保護者と接するのは難しいと感じていたので今回の研修はとても興味深かった

<第4回:ワーカーとして育つということースーパービジョンの基礎知識と育ちのプロセスの語りー/担当:福田・藤田/参加人数15人>

2月27日(土)2時間/研修の概要:前半は福田が担当し、スーパービジョンの基礎知識を確認した。後半は、浜松市においてSSWのスーパーバイザーである平川氏に、2008年から現在に至るまでの実践の軌跡について語っていただいた。参加者から、浜松市におけるSSWの歴史そのものを知ることができて大変有意義であったとの声を頂いた。

#### **葛藤、悩み続ける、経験、気づき、長期的に寄り添う、巻き込まれ続ける**

自己表現能力が十分でない児童の様子から、不安定な心理の要因を把握することは容易ではない。性急な結論を求めず、長期的な寄り添い支援が必要だ/SSWとしての●年間の中で「あれで良かったのか」と悩む体験もある。今回の研修で「わからないままでいて、考え続ける」=「巻き込まれ続ける」ことが大切であることを知って心を強くした/自分自身の経験が今のSSWとしての基礎や価値を作っているのだから、自身も歩みを振り返り、一つ一つの出来事の意味を考えていきたい/葛藤を持ち続けていいのだというのを常に自分の中に置いておきたい

#### **スーパーバイザー、スーパーバイジー、尊厳**

スーパービジョンの基礎を学ぶ良い機会になった/ワーカーの専門性の特徴が「尊厳」であると学んだが、このことはきっとこれからの私のワーカーとしての活動の根底になるものだと感じた

#### **成長、信じる、SSWとしての資質向上、自己研鑽、総合力**

常に多様性を受容する柔軟性、倫理と価値・権利擁護の堅持を意識下におき、尊厳をもって関わる姿勢を継続したい/「超えられない壁に直面したときうずくまってないでうろつくこと」という言葉と、「(子ども)本人の成長する力を信じる」という言葉が心

に残った／現在、●年関わっていても変わらないケースがあるが、今回の研修を受けて、恐らく自分にとって忘れられないケースになると感じた／学校現場環境も各校異なる中で、SSWの業務レベルの標準化は難しい課題／SSWは人間としての総合力が必要

【全体共通のキーワード】

抽出された課題	主なリアクションペーパーへの記述内容
【ソーシャルワーカーとしての基本的な課題】 アセスメント、多機関連携・協働、支援の空白、制度の狭間を作らないのりしろ機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 正しい知識／事例を通してアセスメント力を高める</li> <li>✓ 多機関連携・協働のために支援者同士が顔の見える関係／「のりしろ」となって連携／制度の狭間をなくす／自分の守備範囲を広げる／お互いの立場を理解し、思いを共有／支援の切れ目を作らない</li> </ul>
【SSWとしての課題】 学校側の理解促進、保護者・家族理解、義務教育終了までに生徒自身の救われ感の実感やレジリエンス向上に寄与、アウトリーチ、高校との連携、家庭支援の必要性、ヤングケアラー	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 学校側の親の理解（発達障害や精神疾患）が欠如／保護者の特性からくる生活や養育の困難さや困り感／教育現場と共有しながら支援／親の発達障害による不適切養育や虐待／親自身に障害の特性の理解や受容がない／保護者の精神疾患／家庭というプライベートな空間で孤立している児童や生徒</li> <li>✓ 義務教育終了後青年期の支援が薄い／義務教育終了までに SOS で救われたと感じる経験を／早期に適切な支援を受けることが、その人のレジリエンスにつながる／SSWは問題を早期発見し早期支援につなげるアウトリーチの役目／高等学校との連携</li> <li>✓ 家族に要介護者や障害者、乳幼児／専門分野との連携が必要／ヤングケアラー（生徒が母の介護）</li> </ul>

【まとめ】

抽出されたキーワードや主なリアクションペーパー（感想）への記述内容から、今回の研修が、発達障害、精神障害等への理解と対応という個別理解の側面と、ソーシャルワークにおける連携と協働の課題やスーパービジョンの理解やSSWとしての育ちのプロセスの語り、といった、連携やSSWとしての実践の振り返りの側面がバランスよく配置された構成であり、SSWの質向上に貢献したと考える。

各回抽出されたキーワード（二次障害・負の循環、SSW、SC、発達支援、教育現場、レジリエンス、受容、アセスメント、身近な社会資源、地域、見守り、みんな、フォーマル・インフォーマル、政策、医療、歴史、虐待、暴力、家庭の現場、葛藤、悩み続ける、経験、気づき、長期的に寄り添う、巻き込まれ続ける、スーパーバイザー、スーパーバイジー、尊厳、成長、信じる、SSWとしての資質向上、自己研鑽、総合力）及び共通に抽出されたキーワード（アセスメント、多機関連携・協働、支援の空白、制度の狭間を作らないのりしろ機能・学校側の理解促進、保護者・家族理解、義務教育終了までに生徒自身の救われ感の実感やレジリエンス向上に寄与、アウトリーチ、高校との連携、家庭支援の必要性、ヤングケアラー）は、ソーシャルワーカーとしての基本的な課題であり、SSWとして更なる取り組みの深化が求められる課題でもあるため、今後も社会福祉学研究科としてSSWの質向上に貢献していく必要があると考える。